

保育園の園舎建築についての調査研究

—園舎建築と保育内容の相関に着目して—

下 口 美 帆
和 田 幸 子
山 崎 玲 奈

I. 背景と目的

1. 教育研究上の背景

京都光華女子大学こども教育学科における保育士養成課程4年生科目「保育実践演習」では「理想の保育園づくり」をテーマにグループ活動を重ね、保育内容の見直しと、保育環境のあり方について学修している。その中で浮かび上がってきた課題は、園舎建築と保育環境、保育内容の有機的な関係を示す資料の少なさであった。

先行研究としては、建築界における調査研究として、山田・服部(2005)による「保育園施設の建築計画の実態と保育室の使われ方に関する調査報告」において、保育室の使用法、保育者の経験年齢と環境設定の視点の変化、園児の年齢と机の常設率の関係、保育室以外の地域支援の部屋などの設置状況についてなどが報告されている他、伊藤・山田(2014)による「就学前保育施設における成人の記憶に残る建築空間と活動場面に関する研究」では、主に大学生を対象に、保育園で記憶に残っている事柄とその理由を調査、記憶に残る場面の要素と要因を分析し、記憶に残る場面は遊びの時が多く、場所は保育園の中でも屋外遊具が多かったことを明らかにしている。さらに保育・教育界における先行論文としては高橋(2011)による「子どもの発達のための環境とは何か—保育所における物理的環境の調査—」において、モンテッソーリ教育の環境構成と一般園の環境を比較しながら、幼児の自律を促す物理的環境に対して、専用室の少なさ、手が届く高さの定義の曖昧さ、トイレの環境について問題提起を行っている。

いずれも、保育園園舎建築における、園舎や保育室といった物的環境が園児や保育者にどのような影響をもたらすかという点から調査されており、実際の使用

法という点では興味深く有用な内容であったが、我々が最も着目したかった、園舎建築に込められた園長を始めとする保育者の意図や、保育内容との関連、園児の反応等については伺い知ることが出来なかった。

2. 社会的背景

また、1960年代～1970年代に取り組まれた、保育所運動時代に建てられた保育所が21世紀初頭から建て替えの時期を迎えだしている。高橋(2011)によれば、3～5歳児の保育室のある園舎に限定された調査ではあるが、最も多かった園舎の建築年は2000年代の33.5%であり、次いで1970年代の27.7%となっている。これら2000年代に園舎を建設した保育所の開設年は1970年代以前に開設された保育所が半数以上の53.2%を占めており、2000年代にこれらの保育所が園舎を改築したことが考えられることが示されている。

そのような状況から、建築界の方面からは、子どもの育つ環境研究が進められ、その具現化としての園舎設計が見られるようになってきた。優れた建築物を紹介する雑誌『新建築』においても、保育所、幼稚園、こども園特集号が刊行され、また、園舎を紹介する書籍も複数発刊されてきている。今こそ、このような園舎で展開される保育の実践に着目し、園舎建築と保育実践とをつなぐ努力がなされる必要があるだろう。

そして、これからの保育者は、園舎建て替えや改築の機会に遭遇し、意見を求められることが予測される。保育者は「園舎建築」というものを、与えられた不変の環境としてではなく、園舎環境を読み解き、自らの保育内容と有機的に関係させて保育を組み立てることや、保育内容をより良いものにするための園舎とはどのようなものか、提案する力も求められるようになると考えられる。

3. 問題意識と目的

以上の状況から、保育士養成課程の学生が、園舎建築を保育に関する現代的課題としてとらえ、園舎づくりへ主体的に関与をする姿勢をもつことは緊急の課題であり、保育者養成教育に求められる課題である。本研究では、園舎の中でも、保育所に焦点を当てる。保育所は0歳児から就学前までの子どもが過ごす「児童福祉施設」である。0,1,2歳児は健康、安心を保つための配慮が多く、そのような在り方に適した園舎と、より集団的に活動を広げていく3,4,5歳児の在り方を尊重した園舎づくりへの視点を持ちたいと考える。

4. 方法

そこで、特徴的な園舎建築を持つ保育園・こども園として、建築雑誌『新建築』をはじめとする資料(注1)をもとに、園舎建築を活かしながら魅力的な保育が行われている6か園を選定し、園舎建築の特色を調査すると共に、園長へのインタビューを行い、園舎建築に込められた思いや、実際の保育内容との関連について聞き取りを行った。本研究では調査を行った園舎の特色について報告し、考察を行う。

Ⅱ. 調査報告

1. 野中こども園(静岡県富士市)

野中こども園は、野中保育園として1953年に開園した。平地ではない広大な土地に木、池、小山、井戸があり、小動物、植物と存分に触れ合うことができる環境である。1971年に野中ザウルスと呼ばれる園舎を建築した。1980年に野中丸と名付けた3,4,5歳児棟を建設、いずれも富士山を望めるよう低い建物で、環境デザイン研究所が設計を行った。

パンフレットには「太陽と水と土に代表される自然を充分に取り入れる自由保育」と記され、「大自然に挑む中で子どもたちが育てられていく」ことを理念とする「大地保育」を実践している。子どもが自ら活動を選び、納得するまで取り組めるように、一斉の「おかたづけ」はしない。「水」、「火」(料理)、「刃物」(料理と制作)を使う時のみ一斉保育として行っている。子どものけんかは状況を見守り、危険がない限り気持ちを出しきるような状況にしたいと考えている。わらべうたを語りかけるように歌うことを大切にしてお

り、保育室内にはピアノは置いていない。

そんな野中保育園は、長く3,4,5歳児のみの保育をしてきたが、この20年間で乳児保育の要請が高くなってきた。そこで2016年、野中ザウルスを解体し、木造の乳児棟を建築した。乳児棟は保育室前に幅広のウッドデッキを設置、室内でもなく屋外でもない「境」としてのウッドデッキの場は意味深いと考えている。1,2歳児がウッドデッキを走るため、自然に減速できるように木の迷路を設置している。

2018年、幼保連携型認定こども園に移行し、野中こども園となった。現在の園舎は、幼児棟「野中丸」、木造の乳児棟、厨房、保育運営管理棟が中庭を中心にして配置されており(図1)、乳児棟、厨房前はウッドデッキでつながる。少し低い位置に厨房があるので、子どもたちはウッドデッキからガラス戸を通して調理の様子を見ることが出来る。また木登り、小山登りを存分にできるように園庭を通り過ぎたところに子育て支援棟がある。

幼児棟「野中丸」は軽量鉄骨造である。室内にロフトが設置され、そこへは登り棒または梯子を使って登るため、登る力をつけた子だけが登ることができる(図2)。園舎設計、保育環境づくりはシンプルに余白を残し、保育者と子どもで作っていくものと考えている。



図1 富士山を望む野中こども園



図2 野中丸 内部のロフト 上るための梯子がある

2. 美濃保育園（岐阜県美濃市）

美濃保育園（図3）は1944年に開園、現園舎は1977年に改築（鉄筋コンクリート造2階建て）されたものである。2003年内装を木質化、2012年に象設計集団による設計の、木造の育児支援棟・遊戯室が完成した。

曹洞宗善応寺を中心に西側に園庭、南側に園舎、北側に育児支援棟・遊戯室がある。園舎は斜面に添って建てられているため、隣の保育室へは4段の階段をのぼっていく造りで、各階がスキップフロアのように見通せる（図4）。玄関を挟んで斜面に園舎、下ると園庭のため、靴箱のある玄関が活動の起点となっている。

保育内容に「木育」を取り入れている。これは県資材補助金の利用、森林文化アカデミー、ぎふ木育プランニングとの共同教材開発によるもので、3,4,5歳児の3年間使う椅子を親子共同でつくることのほか、様々な樹木の木片を使ったペンダントづくり、自分用のはし・スプーンづくり、木工の取り組みがある。のこぎりをつかうための固定台の考案など、子どもの力でできるように工夫を重ねている。子どもたちは自分の道具を作り、木の香り、肌触りを楽しみながら使っている。園長の手作りというまごごとコーナーは大きな2段ベットのような設えである。

育児支援棟・遊戯室（図5）は、天井の梁（図6）や木の形を残しながら磨き上げられた柱（図7）が各所にあり、旧園舎敷地内にあった銀木犀で作られたド



図3 美濃保育園



図4 階段状の造り

アの取っ手、ウッドデッキなど、随所に「木」が感じられる造りとなっている。大きな軒のもとにあるウッドデッキには腰かけて利用できる小さなプールがあり、冬場は温水にして足湯が楽しめる。美濃和紙に柿渋を塗ったふすま、地域の木の葉を石膏で型どり旧園舎のガラスを溶かして流し込んで作ったガラス戸など、地元の資材を存分に生かしている。

また、ホールにしつらえられた色ガラスの小窓からは光が差し込み、時間による光の変化を感じ取れるようになっている。



図5 木造の育児支援棟・遊戯室 外観



図6 天井の梁が見える



図7 木の形を残して磨き上げた柱

3. おおわだ保育園（大阪府門真市）

大和田保育園（図8）は、1981年に開園、現在の園舎を建築し、現在に至る。1997年に建設したログハウスの1階を0歳児保育室として使用している。体を思いきり動かして遊びを提供する場にしたい、無駄な動きをなくしたい、という2点を追求し、討議をし、環境の再構成を重ねている。

そのようなプロセスの中で、2005年にトイレ改修を行った。排泄の大切さを伝えるためのトイレ環境づくりを目指し、「トイレ会議」と称した勉強会を重ね、子どもの身体に合う便座の大きさ（図9）、形、トイレットペーパーの位置、動線、入口、ユーティリティを考えた。改修後のトイレは、保育室と緩やかに分かれているが、空間的にはつながっており、床は木質フローリング、スリッパはなし、トイレと保育室はすのこ状の壁で仕切って保育士が上からのぞくことができる高さに設定（図10）、左右2か所の入り口とにじり口の採用、個室ではなく幼児用便器を並べ、どちら向きでも使用可能とした。オマルから便器への移行コーナーを設けるなどの特徴を備えている。

このようなトイレ改革を通じて、保育環境に対する創造力が保育者の中に育ったとのことである。他の保育環境に対しても、例えば備品を置く場所と意味を考えて配置するようになったという。安全を担保したうえで環境づくりの工夫をするようになり、各保育室は壁や棚で仕切らず、観葉植物をならべて緩やかな仕切りとしたり（図11）、天井や壁面からオブジェを吊るすなど、子どもから見てわくわくするような空間を追求している。また幼児の保育室には木製のロフトを設けて高低差をつくり、子どもが視点をかえて活動できるようにした。絵本室は、たとえば「いぬ」「くるま」といったカテゴリーで絵本を分類し、絵本の表紙が見えるように配架を工夫している。このように大型の保育環境の改革から、物の配置といった身近な環境の再考に至って、変革をしてきた。まさに「トイレが変われば保育も変わる」歩みになっているとのことである。



図8 おおわだ保育園



図9 身体の大きさを考慮した便器



図10 すのこ状の仕切り



図11 おおわだ保育園 保育室

4. うらら保育園（東京都葛飾区）

うらら保育園（図12）は、1977年太陽の子保育園開園（認可外）として開園、1987年社会福祉法人となり、1998年現在地に鉄筋5階建ての施設を建設。1階部分を保育園、2階以上は高齢者施設、1階のホールは共用で使用している（図12）。設計は象設計集団である。

鉄筋コンクリートであるが、内装は木質化しており、室内は畳、障子、ふすまを基調とした和室となっている（図13）。自分の活動を見つけて、存分にやりきることを尊重したいと考え、子どもも保育者も居心地の良い保育を探り続けた。園の方針としては土、石、木、水、風、光、緑、布、紙、などの自然素材が心と体にしみこみ、感性が研ぎ澄まされるとの信念のもと、環境を整え、安心できる場、心地よい場づくりを求め続けて現在の環境になっている（図14）。日本の子育て文化、建物の設えをそのまま生かして有機的な保育を

目指すようになった。家具・調度品においてもちゃぶ台、古い骨董家具（図15）、藍の袋を使用し、木、紙、布素材のおもちゃを用意している。保育は畳の上で行っており、食事は板の間です。0,1歳児はテーブルを使い、2歳児以上はちゃぶ台を使う。

3,4,5歳児は縦割りで「〇〇家」と名付け、大家族のように過ごしていることも特徴であろう。

玄関の広いウッドデッキは「内でも外でもない場は行き来する子どもの心にそう場」として重要な場と位置づけている。多目的室と称する部屋は調理室に行きかう通路から5段の階段を上った空間にあり、保育者の見守りの中子どもが自由に過ごせる場となっている。



図12 うらら保育園 外観



図13 保育室は和室となっている



図14 園児の服入れかご 籐の自然素材を使用している



図15 古い調度品を活用

5. レイモンド長浜こども園（滋賀県長浜市）

2011年に保育園として開園し、2017年度からこども園として運営している。園舎設計においては「レイモンド・デザイン・サークル」という、保育（法人榊櫨会）・建築デザイン（アーキヴィジョン広谷スタジオ）・アートワーク（マーズデザインワークショップ）・家具デザイン（小泉スタジオ）の4者が協力して保育環境を作るためのグループが設計を行っている。母体である榊櫨会のホームページによれば、「保育における環境の重要性を強く意識し、質の高い建築を用意しています。また、日常の中にもアートが自然な形で取り入れられ、『モノ言わぬ保育』として子ども達の感性を刺激しています」とあり、建築を含めた環境構成を意図的に行っている。現在のようなコンセプトを持った園舎は同法人榊櫨会の埼玉県坂戸市の園が最初で、その後は経験を活かしながら次の園舎設計を構築している。現在は前述のレイモンド・デザインサーク

ルで保育環境を考えながら新規の園を設計している。過去を活かしながら次の園を構築できるところがよいとのことであった。

外観は伊吹山との調和を意識し、白を基調にした山の峰を感じさせる平屋建てである（図16）。内装は木材を基調に、中央に廊下が貫通しており、端から端まで見渡せ（図17）、大きな窓と腰高の仕切りで広がりを感じさせる空間であった（図18）。設計時に重視したこととして、地域性、自然、木、を大切にすること、動線の検討、死角をつくらない、無駄な空間は削除すること、天井高、ドア、段の高さへの配慮、子どもの目線に無機質なものを置かないようにする（例：エアコンは埋め込む、棚は扉をつけ木目調で壁に一体となる）ことなどが挙げられた。保育室は、あかり・風・色を感じられるように影、窓、光への着目がなされたデザインとなっている。平屋建ての園舎の中で、静と動の空間を分け、子ども達が裸足で、自由に安心して



図 16 周囲の山並みと調和する外観



図 18 保育室 仕切りは棚を利用して腰高の高さに設定

動ける家のような空間作りを心がけている。

また、アートワークス（オブジェ）の設置が意図的になされ（図 19）、壁や天井に小さなドアやいす、古時計、世界時計などの作品が展示されていた。ある時、園児が天井のいすに気づき、園長がそこに「レイモンちゃん（法人のキャラクター：妖精）」の人形を座らせたところ、そこからお手紙のやりとり、声のメッセージ、レイモンちゃんが旅に出る、アートワークスのドアが坂戸（法人内の別の園）につながっているなど、レイモンちゃんと園児のストーリーが生まれ、一年の活動につながっていった。園児の作品展示においても、全員分を一斉に展示するのではなく、額装して食堂の壁に飾るなど、建物内の調和を意識した展示方法となっていた。壁面装飾はなく、ドキュメンテーションとして園児の活動を写真と文字で記録したものを保育室や外廊下に掲示しており、子どものつぶやきを拾って活動につなげることを意識して制作・掲示しているとのことであった。

設計図を見た時、トイレの数が少ない印象であった



図 17 園舎を貫通する廊下



図 19 天井に設置されたアートワークス 椅子の上に園のキャラクター「レイモンちゃん」が座っている

が、園長に実際の使用状況について質問すると、トイレに一斉に行く指導はせず、自分の感覚で行くようにしているのが十分であるとのこと、保育の方法を見据えた園舎設計がなされていることがわかった。

6. たかつかさ保育園（京都府京都市）

たかつかさ保育園（図 20）は 1980 年に開設。園舎に打放しコンクリート仕上げを施し、オープンキッチンのある食堂を備えるなど、当時の保育園としては先駆的な造りであった。食堂には床暖房も備えられてお

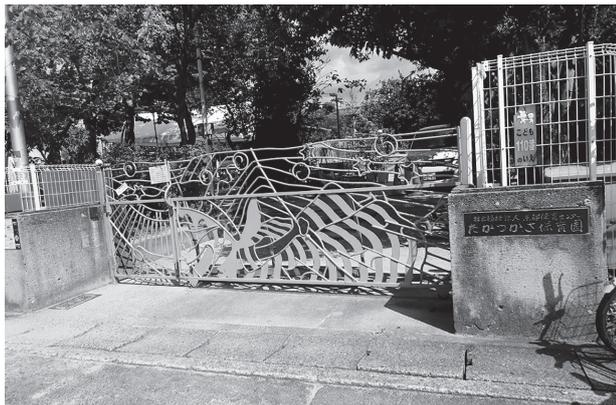


図20 たかつかさ保育園 緑豊かな園庭の奥に園舎がある

り、子どもたちが食堂に集う構造になっていた。また、「かて工房」の河村治夫氏が、子どもにとって中2階という存在が大切であると考え、園の保育室内には中2階（ロフトのようなもの）が設けられた。そして園全体は、中庭を有した回遊構造となっている。現在はウッドデッキやサンルームを新たに設置するなど、園舎に工夫を加えながら使用している（図21）。

園を象徴するものとして、「蚕」をモチーフにした木彫りや陶製の作品が設置されていた（図22）。また、園児が繭や糸を使って作った作品もいたる所に設置されていた。園はもともと、京都工芸繊維大学の跡地にあり（蚕の研究施設があったとのこと）、西陣も近いことから、蚕とは深い縁があった。園でも蚕を飼っていたが、次第に餌となる桑の葉が手に入らなくなり、桑の葉を求めて園長はさまざまところを探し歩いたという。そのなかで、桑畑を作ってくれる方が現れたり、蚕のモチーフの作品を作ってくれる方と出会ったり、今も「蚕」をきっかけとして様々な縁が生まれている。園の歴史や地域性、人とのつながりを大切にしながら、保育環境や活動内容に活かしている様子であった。

また現在の園庭においても、常に創意工夫が加えられており、急角度の「すべり台」や「サイクリングロード」などが設置されていた。すべり台は背が高く、急角度のものであるため、危険も伴う。それゆえ、このすべり台が設置されるまでに、保育者や保護者との間で、数年にわたる検討と話し合いが行われたという。現在、子どもたちにとって、このすべり台は、急勾配を登りきる力をつけた子どもだけが、遊ぶことのできる特別な場所になっている。つまり、すべり台をのぼ



図21 口の字型の園舎に囲まれた中庭 絵本や玩具があるサンルームと人工芝のスペースとなっている



図22 エントランス 園の象徴である蚕の彫刻が見える

り、すべりおりることは、子どもたちにとって大きな憧れであり、目標なのである。何とか登り切った子どもが、今度は怖くて降りられなくなったり、登れないまま、1日下から眺めて過ごしたりするなど、すべり台を舞台に、様々な子どものドラマが生まれているという。また、懸念されたすべり台の危険性であるが、子ども自身がよく注意して遊ぶため、今までに大きなケガはないとのことであった。

一方、サイクリングロードは、最近子どもがストライダーで走れる場所がないことから生まれたものである。最初は園庭に水をまいて、コースを作っていたそうだが、園庭で遊ぶ他の子どもと交錯することもあり、子どもに注意しなくてはならない場面もあったという。大人が注意せずに子どもたちが遊べるようにするにはどうしたらよいかを考えた結果、砂場を削り、手づくりのサイクリングロードが完成した。さらに現在、子どものアイデアを取り入れて、給油所などを設置し、子どもたちが園庭を回遊しながら楽しめるようになって



図 23 保育室 木調の保育室で、あそびのコーナーが設けられている

ている。

保育室は遊びや排泄、着替えなどコーナーごとに分かれている（図 23）。このような保育室の使い方が生まれた背景には、保育形態の変化がある。昔は子どもたちを集めての一斉保育を主としていた。そのため、みんなが集う場所は広く、それぞれのクラスの部屋は狭いといった構造であった。また午睡時は、保育者が子どもの身体を軽くタッピングして「とんとんして寝かせる」のが当たり前だったという。しかし現在は、子どもたちのリズムを大切にして、小グループで活動している。そのため、部屋も目的に合わせて区切って使うようにした。目的に合わせて場所を区切ることで、子どもたちが自分のペース、状態に合わせて、自分で動いていくようになった。午睡時も「とんとん」の必要なく、子どもたちは自然に眠りにつくようになった。

さらに保育室を始めとして、各所に園長自作のおむつ替え台や棚、玩具等が数多くあった。園長によると、「買って来たものだと、その後の変化が生まれませんが、ある物を使って自分で作るのであれば、その後のイメージに合わせて、作り直していくことができる。また、自分で作ってだめだったとわかったら、壊すこと（ためらいなく変更すること）もできる」とのことで、常に園の環境を検討し、改良を加えていることが見て取れた。

Ⅲ. 考察

今回の調査から、各園の共通点として、デザインの時点から保育者の思いが入っていること、環境に主体的、可変的な工夫を継続している点、子どもの視点を

持っていること、職員の動きやすさも同時に考えられていることが見いだされた。特に、環境の工夫によって子どもの気持ちと体の動きが導かれ、保育者が子どもに対して制止をする場面が減少する、といった、「場所が持つ力」を保育者が理解したうえで活かしていた。

空間の特徴としては中 2 階やスキップフロアの採用、天井への工夫など、子どもを主体として「1. 高さの変化への着目」、危険を悪として排除せず、子どもの「2. 冒険と安全」を保障する、内と外をつなぐ「3. 『境』の場の重視」、また、園児が長時間生活する場であることから、「4. 時間による光と影の変化など感覚を刺激するものに対する着目」、といった空間の意味づけの仕方に工夫が見られた。本項ではこの「空間の意味づけに対する工夫」に着目し、1～4 の 4 点について詳述する。

1. 高さの変化への着目

中 2 階やスキップフロアの設置（たかつかさ保育園、美濃保育園、うらら保育園）（図 24,25）、ロフトの採用（野中こども園、おおわだ保育園）（図 26）、天井への工夫（レイモンド長浜こども園）（図 27）、くぐる洞穴のようなスペース（野中こども園、おおわだ保育園、レイモンド長浜こども園）（図 28）など、今回取材した 6 か園すべての園で、意図的に「高さ」「低さ」といった高低差を作っていることが浮かび上がった。園長へのインタビューからも「ウッドデッキから見下ろして調理の様子を見る」（野中こども園）「子どもは天井を見ている」（おおわだ保育園）といった、子どもの目線のありかたを捉えて、子どもを主体とした視点で設置していることが読み取れた。これらの「高さの変化」が感じられる設置物は、遊びの中で自然に視



図 24 たかつかさ保育園の中 2 階



図 25 美濃保育園 午睡スペースは中 2 階



図 26 野中こども園のロフト



図 27 レイモンド長浜こども園の天窓



図 28 レイモンド長浜こども園 くぐった先にコーナーがある

点を変えること、登る・くぐるなどの高さの変化に伴う身体活動、それに伴う心の変化を生み出す環境となっていた。

2. 冒険と安全

高いところに対する心の変化については、「冒険と安全」とも大きく関わる要素である。野中こども園、おおわだ保育園、たかつかさ保育園の事例から考えてみたい。

野中こども園にもともとあった「野中ザウルス」という園舎は、仙田満が後に遊環構造建築として整理し提示した、遊びやすい空間構造の原型ともいわれるものであった（仙田 2016）。追って「野中丸」も同じアイデアで造られている。自然環境を活かした「大地保育」の理念をもとに、大地から建築まですべてを巨大遊具として捉え、子どもたちが思う存分遊び回れるエネルギー的な空間を目指したのである。廊下がなく、その代わりに長く突きだした軒の下をプロムナード

（遊歩道）とし、それとロフト部分の小道が循環して、子どもたちは園舎の端々から上へ、下へと動き回れる。プロムナードと小道は広いところもあるが狭いところもあり変化に富んでいる。上下の移動は、階段、梯子、登り棒があり、また、飛び降りる、滑り降りる、もぐる、ぶら下がる、といった行為が存分にできる構造になっている（図 29）。保育者がより難しい行為に挑戦させるのではなく、子ども自身が自分の能力、そのときの気分にあった方法を選ぶであろう。奮起してやってみようとする子どもには、保育者はそばにいて見守る。

一方、子どもは一人でじっとしたい時もあり、すみっこ、はしっこにいと心地よく感じる時がある。曲がりくねった小道、バルコニー、屋根裏、階段、舞台、橋、天窓の下、それぞれを、子どもは巡って一日を過ごす。従来、死角のない空間をつくる、というのが保育園の基本であった。この常識を覆すような園舎で保育が続いているといえるだろう。



図 29 野中こども園 「野中丸」の梯子と、もぐれる空間



図 30 野中こども園 乳児棟ウッドデッキにある木製迷路



図 31 おおわだ保育園の木製ロフト

見学の際、子どもたちの活発な動きに比べて、静かだという印象を持った。大声を飛ばしあう姿や、保育者の一斉指導がないことからそのように感じたのかもしれない。5～6人で遊ぶそれぞれの遊びに保育者がともに参加している。ピアノを使わず、肉声でわらべうたを歌うことに象徴されるように、保育者は一人一人の子どもへ語りかけるような関わりをしている。つまり、十把ひとからげではなく個々の子どもの感じ方を尊重しようとする姿勢の保育者の見守りの中、たくさん活動して冒険することが保障される日々を過ごしていると考えられる。仙田が言うように「基本平屋建てなので、危険を感じた子どもが助けを求める声はよく通る」ような構造での保育者の関わりと日々の振り返りによって、安全な日常を保つものとなっているであろう。

そのような考え方は、木造の乳児棟にも生かされている。歩けるようになり走るのが楽しくなった子ども

にとって、裸足で一直線に走れるウッドデッキは魅力的な場であろう。匍匐する子どもを避けるように、と保育者から注意されることは、走る子どもにとっては不自然なことである。木の迷路を設置することによって自ら走る速さをゆるめるようにして安全を守ることと、走る子どもの冒険心を満たせるようなアイデアが発揮されている（図 30）。

おおわだ保育園の幼児保育室の木製のロフトにおいても、安全を担保した上での環境づくりの工夫として体を思いきり動かして遊びを提供する場となっている。緩やかな仕切りの保育室が並ぶ一辺を貫く木製ロフトはアスレチックのような気分で登り、上方から見下ろすことができる。迷路トンネルや小部屋がトイレの脇にもある。各保育室での保育から途切れることなくこの木製ロフトでの活動ができる（図 31）。

たかつかさ保育園においては、園庭の急角度の「すべり台」（図 32）や「サイクリングロード」（図 33）において、子どもの冒険心が満たされる。「すべり台」は急こう配である故、挑戦するまでのプロセスは子どもにとっては自らの力に向き合うときとなる。保育者も葛藤を沈めてそこに寄り添う。スライダーに乗って「サイクリングロード」を思いきり走る爽快感への想像力を持つ保育者は、不用意な声かけをしなくてよい環境を作りだしていく存在となりうることを示している。それは子ども同士がぶつかる危険性をなくしていく環境づくりでもある。

これら、高いところに登る、思い切り走る、といったことは子どもにとっては憧れの活動である。その気持ちを尊重したいという保育者としての構えがあり、



図 32 たかつかさ保育園の急こう配のすべり台



図 33 たかつかさ保育園のサイクリングロード

本人にとってもまた、他の子どもにとっても安全が確保できる環境づくりが、設計に組み込まれ、改修が重ねられていることがわかる。

3. 「境」の場の重視

先述したように美濃保育園においては、玄関に園児の靴箱があり、靴を脱いで園舎に入る、または靴を履いて斜面下の園庭に行く、というように、靴箱のある玄関が活動の起点となっている。しかし一般的に多くの保育園は園庭が保育室に隣接しており、靴箱を保育室周辺に設置している。おおわだ保育園、レイモンド長浜こども園においても、保育室の掃き出し窓から続くテラスに靴箱が設置されていた。レイモンド長浜こども園は深い軒が、おおわだ保育園では葡萄棚がテラスに日陰を作っている。野中こども園の「野中丸」は保育室前のプロムナードに靴箱がある。保育園において、登園、降園時に保護者と共に行為するスペースとして、そして、保育中に靴を履いて園庭や中庭に行くという活動の起点は、靴箱の設置場所といえる。保育園においては、この活動の起点の場が重要な意味を持つ。子どもと保護者、子どもと保育者の関わりが非常に多く生じているからである。

野中こども園乳児棟では、靴箱の設置場所でもある保育室前の幅広のウッドデッキは多様な活動の場になっている。端から端まで裸足で走り抜ける楽しさを味わう場のみならず、外の空気を感じながらコーナー



図 34 野中こども園乳児棟ウッドデッキ

遊びを行える場である（図 34）。うらら保育園では畳の保育室から板の間が続き、窓を開けるとウッドデッキに出て園庭へ続く、という造りであり、まさに広い縁側のようなものである。加えて、玄関にも広いウッドデッキがある。室内の床とは異なる質感のウッドデッキが、子どもにとって特別な別所のような気分を生じさせるのだろう。

それぞれの園長とのインタビューでも、これらの場を、内でも外でもない場、内と外をつなぐ「境」として位置付けていることがわかった。屋根はあるが閉ざされず、室内からも園庭からもすぐにアクセスでき、



図 35 美濃保育園子育て支援棟・遊戯室の樹形を残した柱と光を考慮した小窓

ウッドデッキに居る子どもは内でも外でもない開放された気分になる。これから園庭に出てどんな遊びをしようかと思いを巡らしたり、園庭遊びの最中にはウッドデッキに戻ってはまた次の遊びの場に行くなど、活動の拠点にもなる。特に乳児は「外へ行く？中に入る？」と思案したり、靴を履かせてもらったり、自分で履くのを見守ってもらったり、部屋に入ってから昼食を楽しみにしたり、と保育者とのコミュニケーションが生じる場所でもある。毎日繰り返されるやり取りの中で、保育者は子どもの気持ちの変化を読み取り、ふさわしい配慮を行おうとする。またウッドデッキではいわゆる室内遊びを行うことができる場であるとともに、例えば草花遊びや石、土遊びのような室外遊びを持ち込む場ともなる。

たかつかさ保育園においては、サンルームから続く中庭が、内でも外でもない、すぐにアクセスできる場になっているのであろう。

このように「境」の場が子どもにとって、また子どもと保護者、子どもと保育者の関わりの中として重要であるという認識があることがわかった。

4. 時間による光と影の変化など感覚を刺激するものに対する着目

保育園は一般的に朝に登園し、午前中の活動、昼食、午睡、午後の活動を経て夕方に降園する。おおよそ8～11時間といった長い時間過ごす場であり、時間の



図 36 レイモンド長浜こども園 時間とともに天窓からの光と影の角度が変化する



図 37 うらら保育園乳児室 柔らかな光を楽しむ

経過に伴って日の角度も変化する。美濃保育園子育て支援棟・遊戯室では壁面に色ガラスの小窓を設け、時間の経過によってそこから差し込む光が変化する様子を見ることが出来るように設計されていた(図35)。レイモンド長浜こども園においても、天窓から太陽光が差し込み、その光がアートワークに当たって影が出来、時間と共に影の角度が変化するようになっていた(図36)。また、窓にステンドグラスシールを貼付し透過光を楽しむ工夫がなされていた。うらら保育園乳児室では、大きな窓にすりガラスや色ガラスがはめ込まれており、柔らかな光の中で食事をとれる環境となっていた(図37)。

また、多くの園では天井からつるすモビールを設置していた。つり下げ型モビールの設置は、視線を上へ誘導すると共に、風にゆられて動く、空気の流れを視覚的に感じる体験となる。天井にオーガンジーのような柔らかく薄い生地を垂らすと(図18)、圧迫感をもたらすことなくその下は落ち着いたコーナーになる。野中こども園やうらら保育園で見られる、広く取られたウッドデッキの縁側では風を肌で感じることもできる。図38の美濃保育園子育て支援棟・遊戯室のウッ



図38 美濃保育園子育て支援棟・遊戯室のウッドデッキの小さなプール

ドデッキにある小さなプールは足湯にもなり、幼い子どもたちと保護者がリラックスした雰囲気の中で、水遊びをしたりお湯の温かさを感じながらコミュニケーションを取ることが出来る場となっている。

これらの工夫は、変化する光や影の美しさに気づくことや、時間の感覚を園生活の中で自然に感じ取ること、風の流れや温度感覚を肌で感じる、といった経験は、時間・光・影・風・温度といった形はないが確かにそこに存在するものを生活の中で自然に感じ取る仕組みとなっていた。

まとめ

今回の調査から、建物環境の構造と保育内容は密接に関わっていることが改めて確認された。空間の特徴としては、中2階やスキップフロアの採用、天井への工夫など、「1. 高さの変化への着目」、子どもの「2. 冒険と安全」を保障する、内と外をつなぐ「3. 『境』の場の重視」、また、園児が長時間生活する場であることから、「4. 時間による光と影の変化など感覚を刺激するもの」に対する着目も多く園で見られた。

今後も園舎は続々と建て替えの時期を迎え、これからの保育者が「園の建築」に携わり、意見する機会も増えてくるであろうと予測される。そのような機会に面した際に、本研究で提示した「園舎建築と保育内容の関わり」の視点はますます重要となってくるであろう。また、特別に園舎建て替えがなかったとしても、保育者が園の環境を能動的に読み取り、保育内容と結

び付けて考え、保育に生かしていく姿勢が保育の質を高めていくために必要であろうと考える。

今後の課題

保育内容は時間の経過や季節などによって、有機的に変化していくものである。とすれば、園舎の活用方法も、保育内容に応じて変化するものであると予測される。今回の調査は各園1日の訪問調査とインタビューであったため、園舎の特色を知ることはできたが、時間軸を含めた園舎の活用までは調査が及んでいない。今後は、一定期間や季節ごとに訪問調査を行い、保育内容と園舎建築の関係について調査研究を進めたい。

付記

本研究は日本保育学会第73回大会におけるポスター発表「保育実践を支える保育園園舎と保育環境について—保育者養成課程の授業構築に向けて—」をもとに大幅に加筆したものである。

謝辞

6か園への見学、インタビューは、「学びの集大成としての『保育実践演習』授業構築の試み」として、京都光華女子大学 平成31年度 特別研究の助成を受けて行った。有意義であったことを報告し、感謝を申し上げる。

注

- 1) 見学に際して資料とした文献は下記のとおりである。

野中こども園：

- ・新建築社編(1972)『新建築』11月号、
- ・仙田満(2016)『こどもの庭 仙田満+環境デザイン研究所の「園庭・園舎30」』世界文化社

美濃保育園：

- ・雲山晃成(2017)「木と育つ子どもたち7」『グリーンパワー』7月号/9月号/10月号、
- ・象設計集団編(2016)『11の子どもの家：象の

保育園・幼稚園・こども園』新評論

おおわだ保育園：

- ・無藤隆・汐見稔幸（2007）『保育園は子どもの宇宙だ！—トイレが変われば保育も変わる—』北大路書房

うらら保育園：

- ・象設計集団編（2016）『11 の子どもの家：象の保育園・幼稚園・こども園』新評論

レイモンド長浜こども園：

- ・新建築社編（2013）『新建築』4月号

たかつかさ保育園

- ・渡邊保博（2000）『『最低基準』考—青葉台バオバブ保育園の園舎建築に学ぶ』『季刊保育問題研究』183号

文献

伊藤美春・山田あすか（2014）「就学前保育施設における成人の記憶に残る建築空間と活動場面に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第79巻 pp.79-87

下口美帆・和田幸子・山崎玲奈（2019）「保育者養成課程における学びの集大成としての『理想の保育園づくり』～『保育実践演習』の授業実践と考察～」『京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第57号 pp.151-162

仙田満（2016）『人が集まる建築』講談社 104-114

高橋節子（2011）「子どもの発達のための環境とは何か—保育所における物理的環境の調査—」『発達研究』第25巻 pp.107-120

山田恵美一・服部岑生（2005）「保育園施設の建築計画の実態と保育室の使われ方に関する調査報告」『日本建築学会技術報告集』第21号 pp.239-242

檸檬会ホームページ LEMOND CHILDREN
<https://www.lemonkai.or.jp/project/> 2020年9月9日閲覧

